

感染症・予防接種レター (第 106 号)

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会

岡田 賢司 (委員長) 久保田恵巳 越田 理恵 城 青衣 庄司 健介
菅原 美絵 多屋 馨子 (副委員長) 並木由美江 三沢あき子 渡邊 久美

保育・教育施設等の感染症対策

渡邊 久美

0 歳から就学前の子ども達が集団で過ごす保育・教育施設等では、感染症対策が必要である。「保育所における感染症対策ガイドライン」では「感染症を防ぐには、感染症成立の三大要因である感染源、感染経路及び感受性への対策が重要。病原体の付着や増殖を防ぐこと、感染経路を断つこと、予防接種を受けて感受性のある状態（免疫を持っていない状態）をできる限り早く解消すること等が大切」と言われている。

感染対策を行っていても、感染症は絶えることはない。新型コロナウイルス感染症の流行を経験し、第一に手洗いの大切さ・ウイルスや疾患により適切な清掃や消毒（消毒薬の種類や濃度の調整）が必要になる。またマスクの着用等は、各年齢や子どもの発達に応じた対応が求められることを考え見直す機会になったのではないだろうか。

保育・教育施設等で過ごす乳幼児の特性としては
・乳幼児が長時間にわたり集団で生活する場所であり午睡や食事、遊び等では子ども同士が濃厚に接触することが多い。

・乳幼児が自ら正しいマスクの着用、適切な手洗いの実施、物品の衛生的な取扱い等の基本的な衛生対策を十分に行うことは難しい。

・感染症にかかりやすいことや急変しやすく、脱水を起こしやすい。

・大人からの援助や配慮が必要である。
などが大きくあげられ、保育に関わる大人が子どもを守っていかなければならない。

ワクチン接種は、自分自身が病気にかかりにくくなるだけでなく、社会全体でも感染症の流行を防ぐ効果がある。特に抵抗力がない子どもたちが集団で過ごす保育所等では予防接種は有効な感染対策になる。子ど

もだけでなく、保護者や家族にとっても感染症の発症あるいは重症化を予防することができる。また、多くの人が予防接種を受けることで免疫を獲得していると、集団の中に感染患者が出ても流行を阻止ができる「集団免疫効果」が発揮されることにつながる。感染症はワクチンで防げる疾患だけではない。また、園児の中には、まだ予防接種を受ける月齢に満たない 1 歳未満の子どもたちや、ワクチンを接種することができない人を守ることもつながっていく。ワクチンや予防接種スケジュールは医療の進歩に伴い更新されていくため、子どもたちに関わる職員は常に最新の情報を得ていく必要がある。

4 月からのワクチンの変更の情報

2024 年 4 月より、五種混合ワクチンが定期接種になった。2024 年 4 月から四種混合 (DPT-IPV) とヒブワクチンを混合した五種混合ワクチン (DPT-IPV-Hib) ジフテリア (D) 百日咳 (P) 破傷風 (T) ポリオ (IPV) ヘモフィルス・インフルエンザ菌 b 型 (Hib) となった。スケジュールは、初回接種：生後 2 か月に達した時から生後 7 か月に至るまでの期間を標準的な接種期間として 20 日以上（標準的には 20 日～56 日まで）の間隔をおいて 3 回。追加接種：初回接種終了後 6 か月以上、標準的には 6 か月から 18 か月までの間隔をおいて 1 回。2024 年 2 月以降に生まれた赤ちゃんは原則として五種混合ワクチンを接種することになる。

小児の肺炎球菌感染症に対するワクチンは原則として沈降 15 価肺炎球菌結合型ワクチン (PCV15) を使用する。新たに 2 種類が追加され、15 種類の肺炎球菌に対して予防効果を有している。これにより、従来よりも多くの種類の肺炎球菌に対して予防効果が期待できると考えられている。

保育所等側は予防接種の内容の変更により、子ども達の中で接種ワクチンやスケジュールが異なっていくので、一覧表等を用いて把握していくとよい。

また、予防接種についてさまざまな考えがあるため、嘱託医に相談しながら保護者や職員に情報提供をしていく必要がある。

職員、保護者等、実習生、大人に必要な主なワクチン

園児の健康だけではなく、自分自身の健康を守ることも重要であり、新入園児の保護者や新入職員等には情報提供が必要となる。

麻疹・風疹・水痘・おたふくかぜワクチン等は罹患していない場合は2回接種が必要となる。10月以降はインフルエンザワクチンの接種も開始になる。また、保育所等の職員は、子どもの出血を伴うけがの処置等を行う機会があるため、B型肝炎ワクチンの接種も大切と考えられる。職員についても自分で予防接種歴を把握するように自己管理できるとよい。

保育・教育施設等では子どもの送迎や同居の家族も関わることもある。带状疱疹は、水痘・带状疱疹ウイルスにより、初感染で水痘を引き起こした後、知覚神経節に潜伏感染し、免疫低下などが誘因となり再活性化を起こして発症する。発生頻度は、加齢に伴い増加する傾向があり、50歳を境に発症率が急激に上昇すると言われている。ワクチンは2016年3月より水痘ワクチンが高齢者の带状疱疹予防目的で使用できるようになっている。(対象：50歳以上) 園児の家族が発症した場合の対応も嘱託医と相談し備えておくといよい。

また、RSウイルス感染症は、RSウイルス(RSV)を病原体とする、乳幼児に多く認められる急性呼吸器感染症である。高齢者におけるRSウイルス感染症で

は、肺炎の合併が認められることも明らかになっており、年長の児や成人における再感染例では、重症となることは少ない。ワクチンは、2023年以降、ハイリスクの乳幼児を対象とした長期の効果が期待できる新たなヒト化抗RSV単クローン抗体製剤や60歳以上を対象とした予防ワクチン、母体からの移行抗体を高めることで乳幼児への感染を予防する、妊婦を対象としたワクチンが承認されている。

保育・教育施設等では実習生の受け入れもあるため、「保育所における予防接種と感染症に関するあるあるQ&A 35」「医療・福祉・保育・教育に関わる実習学生のための予防接種の考え方」を参考に、対応するとよい。

最新のワクチン情報を入手しながら、園児や職員の予防接種状況を定期的に確認し、必要な時に接種できるように情報提供し健康管理をすすめて行きましょう。

文 献

- 1) 厚生労働省 子ども家庭局 母子保健課.“保育所における感染症対策ガイドライン(2018年改訂版) こども家庭庁 2018(平成30)年3月(2023(令和5)年5月一部改訂)”. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/e4b817c9-5282-4ccc-b0d5-ce15d7b5018c/c60bb9fc/20230720_policies_hoiku_25.pdf
- 2) 国立感染症研究所.“定期予防接種スケジュール”. https://www.niid.go.jp/niid/images/vaccine/schedule/2024/JP20240401_01.pdf
- 3) 国立感染症研究所.“IDWR 2024年第15号<注目すべき感染症> RSウイルス感染症”. <https://www.niid.go.jp/niid/ja/rs-virus-m/rs-virus-idwrc.html>